

《新刊紹介》

高島純夫・齋藤貴弘・竹内一博著
『図説 古代ギリシアの暮らし』

小山田 真帆

古代ギリシアについて書かれた一般書は数多く出版されてきたが、古代ギリシアの日常生活について本書ほど豊富な図像や写真を交えて解説したものはこれまでなかっただろう。著者の高島氏、齋藤氏、竹内氏はいずれも古代ギリシア史、特にアテナイ史の専門家として何度もギリシアの地を訪れて（あるいは長年現地で生活して）おり、本書には博物館の図録やギリシア美術の専門書のなかで目にすることのできる図像だけでなく、著者らが現地で撮影してきた遺跡や碑石、現在の風景の写真なども数多く収められている。

本書はタイトルの通り古代ギリシアの生活について幅広く解説しており、「アテナイの景観」、「アテナイ市民の一生」、「ポリスに生きた人々」、「日々の生活のなかで」と題された4章と、多様なトピックを扱った15のコラムによって構成されている。著者らの専門分野ならびに日常生活という史資料の残りにくいテーマから、本書ではアテナイが中心に据えられ、扱う時代も前4世紀後半までに絞られてはいるものの、可能な限り他ポリスの状況にも言及するなどバランスの取れた記述が試みられている。

第1章「アテナイの景観」では、ポリス・アテナイの成り立ちや地理的な状況などの基礎的情報が紹介される。第2章「アテナイ市民の一生」はアテナイの場合を中心としながら、市民の男女がどのように人生を送ったか、それぞれのライフステージに応じて描写している。そのなかで市民男性の政治生活や、結婚に伴う宗教儀礼、相続などについても解説されている。第3章「ポリスに生きた人々」は市民のみならず外人や奴隷にも目を向けており、富裕者や貿易商人、銀行家などポリスに大きな貢献をした者たちだけでなく、小商人や職人、娼婦といった庶民たち、またポリスからポリスへ流浪する人々についても説明を加える。さらに人々の差別意識を扱った節では、市民・非市民間だけでなく、市民同士でもそうした意識があったことが指摘されている点は興味深い。アテナイの農業の状況や、戦争の具体的な様相について触れられるのもこの章である。第4章「日々の生活のなかで」は衣食住や宗教について扱い、人々の日常生活そのものをリアルに伝える内容になっている。とりわけ宗教に関する節では、ギリシア人にとって宗教がいかなるものとして捉えられていたのかが詳細に説明されており、一般の読者のみならず他時代・他地域（特に一神教圏）について学ぼうとする人にも比較史的視点を与えてくれるかもしれない。

本書中に挿入されたコラムでは、以下のようなトピックが扱われる。①言葉の訛り・方言、②家の構造、③多彩色の世界、④水道、⑤玩具と遊び、⑥同性愛、⑦ライフサイクルと家族のあり方、⑧墓・墓誌・レリーフ、⑨音楽、⑩街道・旅行、⑪度量衡・貨幣、⑫重装歩兵と盾、⑬暦、⑭植物・動物・虫、⑮ギリシア神話。並べてみるだけでも多彩なテーマが扱われていることがわかるが、それぞれが簡潔ながらも詳細な解説を提供している。

一般の読者にはもちろんのこと、これから古代ギリシアの文化や社会について学ぼうとする人にとっても有用なコラムである。

本書は一般の読者を想定して書かれたものであるが、研究者にも重要な示唆を与えてくれる。「はじめに」でも述べられるように、ある歴史的社会の残した遺産や達成した偉業を理解するためには、それらがいかなる「暮らしの総体」によってもたらされた結果なのかを知る必要がある。生活史や社会史だけでなく、政治史や法制史、あるいは歴史学に限らず哲学や文学を専攻する者にとっても、傑出した政治家や哲学者の言動を理解するために、彼らを取り巻く環境がいかなるものだったのかを知ることは深い意義を持つだろう。加えて、研究者であっても子細に渡る専門的な研究を続けていると、ともすると灯台下暗しになってしまいそうな当時の服飾や食事、家の中の様子といった日常生活の具体的な諸相についてコンパクトにまとめられている点も、専門家にとって利便性の高い点である。また、本書で豊富に用いられている陶器画やレリーフの図像は、それらが日常生活の実像を直接反映しているかどうか判断しがたいという留保を付ける必要はありながら、文献資料と向き合うだけでは想像しにくい当時の生活の一側面を見せてくれる。

本書の魅力は多彩な図像だけではない。現代のギリシアを歩くことで古代ギリシアの暮らしを感じられることを、著者らは読者に伝えている。例えば第 1 章では、外からアテナイにやって来る人が都市の門をくぐって何を見ながら歩いたのか、またパンアテナイア祭で参加者がどのようなルートを辿ったのかなどが詳細に記される。ここで言及されるアテナイ北西部のディピュロン門や、秘儀の地エレウシスへと至るヒエラ・ホドス（「聖道」）は今でもアテネの街に行けばその名残を見ることができ、本書は文字通り古代人の「足跡を辿る」ことで、読者に当時の空気を感じさせることに成功している。遺跡の動植物や、古代も今もギリシアで行われている放牧の様子、現在の食事風景を写した写真もギリシアの古代と現代が交錯する場を伝えている。ギリシアにおける古代はオスマン帝国支配時代に西欧諸国によって「発見」されたとされ、ギリシアの古代と現代は必ずしも一直線で繋がるものとして語ることはできない。しかし本書におけるポリスの地理的説明や現代の写真からは、地理・環境・風土を同じくする「ギリシア」という空間において、人々が連綿と生活を続けてきたことが想像される。現代のギリシアが、古代人や古代世界の実像を理解する手掛かりになりうることを本書は教えてくれるのである。本書を携えながら現地を旅すれば、何か新しい発見が得られるかもしれない。

(A5 変型 127 頁 2018 年 11 月 河出書房新社 税別 2000 円)

(京都大学大学院博士後期課程／日本学術振興会特別研究員 DC)